#

スターバックス
キタガワ、コーヒーの入ったカップを手に、窓際のカウンター席に座っている。大きな窓から道を行き交う人々が見える。
マリ、同じくカップを持ってやってくる。キタガワの隣に並んで座る。

キタガワ「それなに？」
マリ「キャラメルマキアート」
キタガワ「ふーん。マリちゃんいつもそれじゃない？」
マリ「わたしコーヒー飲めないから」
キタガワ「ああ、そっか」
マリ「うん、そうなの」
キタガワ「……。でも、キャラメルマキアートってエスプレッソじゃない？」
マリ「うん？」
キタガワ「エスプレッソじゃないっけキャラメルマキアートって？」
マリ「うん？」
キタガワ「うんいや、コーヒー飲めないって言い方だとさ、ちょっとおかしくないかなと思って。だってキャラメルマキアートってさ」
キタガワ、考えこむように黙り、スマホでスタバのメニューを検索して調べはじめる。
マリ、カメラ目線で。もしくは立ち上がって、等。
マリM「わたしは彼のこういうところが嫌いでした。こういうところっていうのは、具体的に説明するのは難しいけど……とにかく面倒くさいところ。だってそうでしょ？「そっか」「そうなの」で終わらせておけばいいのに」
キタガワ「あほらやっぱりそうだほら（マリにスマホを見せ）エスプレッソの項目にあるよキャラメルマキアート」
マリM「揚げ足取り……ほとんどいちゃもんみたいな感じで、こっちが全然望んでない方向に話を広げて、この顔です。この喜々とした顔。「やっぱりそうだ」「やっぱり僕の言っていることが正しいよねそうでしょ？」っていう」
キタガワ喜々とした顔のキタガワ。を、ジト目で見るマリ。
マリ「（喜々）だからさ」
キタガワ「（遮り）キャラメルマキアートは甘いから」
マリ「……あ。甘いから」
キタガワ「うん。甘いから、飲める」
マリ「ああ、そっか」
キタガワ「うん、そうだよ」
マリ、キタガワ、それぞれ正面を向き、めいめい飲み物を飲む。

キタガワ　「……。……え、待って。じゃあさ、コーヒー飲めないじゃなくて、「甘くないと飲めない」じゃないの？或いは「苦いと飲めない」じゃないの？なぜならキャラメルマキアートはエスプレッソの項目に分類されていて、エスプレッソはコーヒーの一種なわけだから」

マリ　「（ちら、と見て）〝或いは〟」

キタガワ　「……なに」

マリ　マリ、半笑いで。

マリ　「いや〝或いは〟って、なんか、喋り言葉で使う人いるんだーって。改めて？」

キタガワ　「……。いるでしょ。口語でも使うでしょ」

マリ　「どうかなあ。使うかなあ。わたしは使ったことないなあ」

キタガワ　「……」

マリＭ　「あと、〝なぜなら〟もないなと思ったけど言いませんでした。言うとそれはそれで面倒くさいので」

キタガワ　「僕はキャラメルマキアート飲んだことない人だよ？」

マリ　「うん？」

キタガワ　「だから、マリちゃんはいつもキャラメルマキアート飲んでる人だけど、僕はキャラメルマキアート飲んだことない人だよって。つまりそういうことでしょ」

マリ　「……うん。……うん？」

キタガワ　「だから、僕は口語で〝或いは〟を使う人だけど、マリちゃんは口語で〝或いは〟を使ったことない人だよって、つまりそういうことじゃない？」

マリ　「……あ～」

キタガワ　「そうでしょ？」

マリＭ　「なんか全然わからなかったけど、「うん」と言うまで、」

キタガワ　キタガワ、カメラ目線で。

マリＭ　「そうでしょ？」

マリ　「……の猛攻を受けることはわかっていました。だから」

キタガワ　「うん。まあそうだね」

マリ　「と言いました。面倒くさかったので」

キタガワ　マリ、キタガワのカップを指差して。

マリ　「アメリカーノ」

キタガワ　「うん」

マリ　「同じだよね。いっつも、どこいっても、アメリカーノ」

キタガワ　「……甘いと飲めないから」

マリ　「……ああ、そっか」

キタガワ「（ジト目で見て）……」
マリ「うん？」
キタガワ「甘くないというのが条件なら選択肢はアメリカーノ以外にもあるけど？って思わなかった？そういう顔しなかった？今」
マリ「（半笑いで）してないよそんなフクザツな顔」
キタガワ「あ、面倒くさいなって思わなかった？そういう顔しなかった？今」
マリ「（笑ってしまって）してないよ」
キタガワ「してるよ、してる。笑ってるし」
マリ「いやでも、アメリカーノ以外飲まない人なの知ってるから。きっとアメリカーノなんだろうなって思って訊いただけだから」
マリM「彼は優柔不断でした。冒険心がなく、疑心暗鬼に陥りやすく、また……」
キタガワ、正面を向いて。店員に注文をする場面。
キタガワ「（メニューを眺め）えー……ットコーヒー」
店員女・声「はい？」
キタガワ「ホットコーヒー」
店員女・声「お豆が選べますがどういたしますか？」
キタガワ「え？」
店員女・声「お豆が選べますがどういたしますか？」
キタガワ「お豆が……」
店員女・声「選べます」
マリM「……想定外の場面に出会すと、テンパる。だからメニューの一番上にあるアメリカーノを選ぶようになったのです。決して好きだからではないのです」
キタガワ「わかってるのになんで訊くのさ」
マリ「（笑って）」
マリM「わたしは彼のそういうところも嫌いでした」
キタガワ「僕はわからないことだらけだよ」
マリ「え～？」
キタガワ「鞄さ」
マリ「うん？」
キタガワ「いや鞄、どうして下に置くの？」
キタガワ、足元を指さす。
マリ、キタガワの指の先を視線で追う。足元に無造作に投げだされているマリのバッグ。
マリ「……置くとこがな、」
キタガワ「（遮る）あるよ。ここ鞄置き貸しだしてるじゃない。レジの横にあった

もん。あとテーブルの下に……（テーブルの裏側触って）あった！あるよ
ほら鞄掛けハンガーあるよ」
マリもテーブルの裏側を触って。
マリ「これハンガーなの？」
キタガワ「……」
マリ「ハンガーっていうよりフックじゃない？」
キタガワ、確かにそうかもと思った顔。が、認めない。
キタガワ「……それは知らないけど」
マリ「フックだよ。ハンガーじゃないよ」
キタガワ「いや知らないけど」
マリ「こういう形状のものはフックでしょ。調べてみなよスマホで」
キタガワ、スマホを遠ざける。
マリ、キタガワが持っているスマホを指さす。
キタガワ「調べなって好きじゃん調べるの」
マリ「だってさ、鞄は靴ですか？」
キタガワ「うん？」
マリ「鞄は靴？鞄って履く？」
キタガワ「……」
マリ「これは批難とか忠告じゃなくて配慮だよ。衛生的によくないよっていう。
マリちゃんは今、っていうかいつもさ、そのへんの道とか、お店のトイレ
とかいった人たちが踏んでるところに鞄を置いてるわけじゃない。でさ、
家帰ってきてすぐその鞄をソファに置いたりするじゃない。それはつまり、
そのへんの道とかお店のトイレとかいった人たちの靴をソファに置いて
るってことでしょ？」
キタガワ「置かないよ」
マリ「いやいやいや毎日のように」
キタガワ「もう置かないよ」
マリ、きっぱりと。
キタガワ、黙る。
マリ「……いや、でも今してるから、これからもするでしょ。家帰ったら」
キタガワ「でももうあのソファには置かないでしょ」
マリ「……」
キタガワ「あの家には帰らないでしょ、わたしは」
マリ「……」
キタガワ「……」
マリ、キタガワ、それぞれ正面を向き、めいめい飲み物を飲む。

男・声　「それなに？」
女・声　「ん、キャラメルマキアート」
近くの席に座っている男女の会話が聞こえる。
男・声　「へ～俺キャラメルマキアート飲んだことないわ」
女・声　「えーっ。そうなの？」
マリ、キタガワ、そちらを向くことはしないが、会話が気になっている。
女・声　「おいしいよ、あげる。飲んでみなよ」
マリ、男女のほうを見る。
マリ、自分の手元のカップを見る。
男・声　「あ、うま！」
キタガワ、男女のほうを見る。
キタガワ、正面に向き直る。
女・声　「ね、おいしいでしょ」
男・声　「うん、もっと甘いのかと思ったー。めっちゃうまいじゃん次から頼むわ」
マリ、キタガワ、それぞれ正面を向いたまま、めいめい飲み物を飲む。
キタガワ　「あのさ」
マリ　キタガワ、半身をマリに向け。
キタガワ　「（遮り）あげないよ」
キタガワ、ゆっくりと正面に向き直り。
マリM　「なにも言ってないよ。……言ってないでしょ」
キタガワ　「鞄をお店の床に置くたび、彼が嫌そうな顔をしていることは知っていました」
マリM　「僕にはわからないことだらけだよ」
キタガワ　「鞄を家のソファに置いたら注意されたときのことも、ソファに置いても注意されなくなったときのことも覚えていました。わたしが使ったあとの洗面所の水滴を逐一拭いていることも、わたしが畳んだ服を畳みなおしていることも、わたしが仕舞った本を並べなおしていることも、気づいていました。そしてその上で」
マリ　「だってうまくやってきたじゃない」
キタガワ　「彼が本気でわたしと別れたくないと思っていることも」
マリM　「うまくやりたかったわけではないよ。（半笑いで）……っていうかうまくもなかったでしょ」
マリ　「なかったかな」
キタガワ　「わたしは知っていたし覚えていたし気づいていたしわかっていたのですが」
マリM　「でもさ、僕マリちゃんと話してると楽しいよ」
キタガワ

マリ　「全然笑ってないのに？」
キタガワ　「笑ってなくても楽しい人はいるでしょ」
マリ　「（笑って）反対の人もいるよ。笑ってても楽しくない人」
キタガワ　「……」
マリM　キタガワの情けない顔を見て、マリ、さらに笑う。とても楽しい。
キタガワ　「彼は知らなかったし覚えていなかったし気づいていなかったしわかっていなかったのかもしれません」
マリM　「いや、でも、やっぱり、うまくいってたよ。僕はそう思うよ」
キタガワ　「〝或いは〟気づかないふりをしていたのかもしれません」
マリ　「でも、そっか……」
マリM　キタガワ、俯く。
マリ　「好きな人とは、うまくいかない。うまくいく人のことは、好きになれない」
マリM　「……」
俯いたキタガワの肩、徐々に小刻みに震えだす。鼻水をすする音。
マリ、我関せず。スマホをいじる。
「わたしは彼のこういうところが嫌いでした。この世の中の大抵の会話は「そっか」で終わらせられるのに。終わらせられるのに、終わらせない。「そっか」以上の言葉がでてこないとわかっていてもなお終わらせない」
マリM　マリ、ちらりとキタガワを見る。
「……終わらせられないのかもしれません。わたしは彼のこういうところが」
マリ　マリ、スマホを見て、「げっ」という顔をする。
キタガワ　「（涙を拭いながら）そっかあ……そっかああ……」
まだぐすぐすしているキタガワ。を、マリ、面倒くさそうに、引いている感じで見ながら、肩をつつく。
キタガワ、顔を上げる。
マリ　マリ、スマホの画面をキタガワに見せて。
キタガワ　「鞄掛けフック、またの名をバッグハンガー……」
「……（徐々に嬉々）やっぱりそうだ。そうでしょ？ハンガーでしょ？」
マリ、嫌そうな顔。いやフックでもあるだろーが、という。
キタガワ、マリの顔に、笑う。
マリも、笑う。
マリM　「わたしは彼のこういうところが嫌いでした。ほんとうに、反対の人」

Fin